

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

序論：内モンゴルの遊牧とその消失：
梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証するにあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008590

序文：内モンゴルの遊牧とその消失

— 梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証するにあたって

娜仁格日勒

内モンゴル大学
国立民族学博物館外国人研究員

人類の歴史と文化は、民間に受け継がれてきた伝統観念や風習以外に、主として長い歴史のなかに残された、知識の媒体としての各種文献と遺跡遺物とによって後世に伝わる。これらの文献と遺跡がなければ、わたしたち人類は記憶を失うこととなり、歴史も文化も喪失され、知識の蓄積も不可能なことであり、未来への向き合いはもとより、現在への把握もできなくなる。したがって、文献資料の保存と遺跡遺物の保護を重視し、その重要性を十分認識することは如何なる民族にとっても無視できない課題である。

モンゴル民族も含めた遊牧民はその「放浪性」によって、歴史上は牧野長歌が多く、詩書弦誦が少なく、自ら文字資料を持たなかったとよく言われるが、これは偏見である。すでに関連研究で明らかになっているように、モンゴル人はじつに多種多様な手写本をはじめ各種の文献を古代から創りだし残してきた。しかも膨大な量にのぼる。残念なことに、とくに現代に入ってから、さまざまな理由で壊滅的な破壊を受けた。一方、地理的な位置関係のため、19世紀に入ったあと、近隣の諸国をはじめ、世界の各地からそれぞれの目的を抱きながら多くの探検者、旅行者、研究者たちが内モンゴルを訪れてきては調査をした。なかでも、とりわけ、19世紀のロシアと20世紀の日本が代表的であり、残された関係文献も著しく多い。

日本は1900年代前後から満蒙地域へ勢力をさらに拡張するために、大量な人員を派遣し、実態調査をおこない、その結果としての報告、旅行記、踏査記録、研究著書など日本語資料を書きあらわしたことはよく知られている。とくに、モンゴルについての各種の記録は質量ともに世界屈指といってもよい。

これらの調査は近代的な技術手段とフィールドワークの理論方法によって実施され、各領域に跨る正確で且つ詳しいデータを保存し、後のモンゴル研究の各分野に一次資料を提供し、歴史学、民族学、民俗学、社会学、経済学、ないし自然科学の領域で世界的に幅ひろく利用されており、国際学界においてもすでに高い評価を受けている。くわえて、資料の一部はそれ自体が学者の学術的努力の結果であり、戦後の日本のモンゴル学が国際的にすぐれた水準に達するようになる基礎ともなっている。現在では、日本が満州や内モンゴルでおこなった各種の調査資料について、再検討する動きが学界に見られる。

そのようなたいへん豊かな文献群のなかで、梅棹の内モンゴル調査資料は独自性を誇ってきた。梅棹は当時の人々のあいだに伝わる生活の各側面を人類学的に調査し、豊富

な記録を伝えてくれた。この資料は近代的な手法によって得た、当時のモンゴル人たちの生き方を重点に描いた生産誌・生活誌であり、今日ではほぼ完全に消え去った内モンゴルの遊牧文化を書き記したことの意義と資料の独特な価値は本書に収めた諸論考からもその一端がうかがえる。本書を構成する各章は、梅棹内モンゴル調査資料の文献的な価値および方法論を含めた理論見解の合理性・独創性に着目した、多方向からの考察であり、いままでの梅棹資料の全面活用と梅棹論理の検証を大きく前進させたに違いない。

梅棹調査の特徴はなによりも滞在期間の長さと秋冬季の実行という点から生まれた精緻性と全面性にある。この書物はまさに現地出身の研究者たちが「梅棹」を大いに活用するうえで、調査地の現状との比較をおこなったものであり、研究としての学術的な位置づけのほかに、現状を取り扱った社会的な意味も極めて大きい。

本書に収録した諸論文はフィールド・ノート、ローマ字カード、牧畜論草稿、写真、スケッチなどを含む「梅棹アーカイブズ」を多角的に用いており、理論検討と資料活用との両方における独創性を持っている。「梅棹理論の新検討」と「未使用の梅棹資料」の利用が本書物の第1の特徴である。第2の特徴は、文献史料とフィールド資料との併用である。かつての梅棹調査地は現代的变化が非常に激しい地域でもある。この移り変わりを執筆者たちが実地調査に基づき詳細に記述している。各論は梅棹理論を指針にして、梅棹資料を文献史料として扱い、梅棹アーカイブズの貴重性を強調すると同時に、作者たちがフィールド調査で得た実態資料と照らし合わせ、内モンゴルの現在と比較することによって社会変容を解明している。第3の特徴は、現地出身の研究者の発信である。梅棹資料と理論が国際的に重んじられるなかで、内モンゴル出身の研究者ならではの視点が述べられることによって、調査者と当事者の認識のずれが明らかになる。それゆえ、日本のモンゴル学界と梅棹研究に、より多視角的で深い見解や観点が提示できる。本書は梅棹忠夫のモンゴル研究を再検討した成果の集大成であると同時に、国際研究の最先端を示したものであり、現地還元の一形式でもある。

収録した諸論文では、小長谷有紀がこれまでの梅棹研究で収めた成果の一部、例えば国立民族学博物館調査報告 (SER) No. 111 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』(2013) と SER No. 122 『梅棹忠夫のモンゴル調査 ローマ字カード集』(2014) などの刊行資料を多く使っている。このような刊行資料のなかでも、ローマ字に転記されたカードを漢字かなまじりの一般的な文章として書き起こした『ローマ字カード集』は読みやすく、研究に便宜を提供しており、ユニークな価値を有する。本書は梅棹資料を多次元に使用した。

編集者の娜仁格日勒は唯一国立民族学博物館 (みんぱく) に所蔵される資料の精査・分析、すなわち梅棹資料室と図書室の梅棹関係資料を利用し、また、日本で開催された各種の研究會および学会等に参加して、日本の研究者との議論を経ることによって、梅棹研究の分析の範囲と精度をより一層高めた。みんぱく滞在によってのみ可能となる成

果が本書から読み取れるであろう。

本書は7名の研究者が分担し、執筆したオリジナルな研究であり、二つの部分から構成される。梅棹を検証し、高く評価しながら、問題点をあらいだし、異議と批判などの意見を提出した。私たちは、執筆企画と編集の作業過程において慎重な討議を重ねてきたが、最終的には各作者の立場と学術主張を尊重し、あえて論点を画一的に統一することは避けた。学術はさまざまな声があつてこそ進展するものである。

第1部の社会論では、文明論・認識論の視点に立って、梅棹の内モンゴル調査と近代社会認識および遊牧文明史観の位置づけを多様に再検討した。梅棹の内モンゴル社会に対する認識を検証したり、梅棹がみずから論文に利用することのなかった未使用の資料を活用したりして、豊富な示唆が内包される4篇の論文を取めた。ここでは、梅棹調査当時と現代内モンゴルとの比較を通じて、現状への強い関心が示されている。人類学の伝統的なジャンルの文明、文化変容、生活、宗教など長期にわたって論じられてきた課題についても議論が深まった斬新な内容がつけられているほかに、梅棹資料のなかの経済に関する記録を用いて、戦前期内モンゴルの商品取引の特徴が日本のかかわりによって生じた変化を分析した。

梅棹の文明論的遊牧研究は世界的に好評されてきた成果であり、氏のモンゴル社会認識の基礎である。内モンゴル調査はその文明史観の形成に非常に深い影響を及ぼしたのであり、名著『文明の生態史観』の礎はまさに内モンゴルの草原で育まれたのである。この部には、まずウルゲディ・タイブンの論考がある。その「近代モンゴル社会に対する認識—梅棹認識の位置づけ」は、梅棹の近代モンゴル社会論を全面的に再検討した論文であり、その豊富性と合理性を肯定し、梅棹忠夫や後藤十三雄を含めた日本の研究者たちが唱えた学説の脈絡を整理し、モンゴル遊牧の生態学的研究および牧畜経済と技術、遊牧起源論、ラマ教の役割などの問題に関する彼らの基本的な見解を評価したうえで、梅棹のモンゴル社会の近代化に対する論点を批判している。漢人との接触、または漢人の入植によってこそモンゴルの近代化が進むという見解に対して、執筆者は梅棹のフィールド・ノートに具体的なデータが記されているにもかかわらず、提示した結論がその調査データと一致していないことに遺憾な意を示しながら、入植による牧地狭小と遊牧経済の衰退、旅蒙商のモンゴル人搾取と圧迫、マイノリティのモンゴル人の置かれている状況、あらゆる面における植民同化の推進などの問題を取り上げて反論し、梅棹と異なる意見を主張した。さらに、同じ外国人研究者として、梅棹とラティモアや後藤十三雄らとの立場の相違も指摘している。

梅棹の内モンゴル調査のなかで、もっとも綿密に実施されたのは東スノトでのフィールドワークである。調査は家族を単位として、生産・生活のあらゆる面にわたっておこなわれ、詳細なデータを呈した。そのモンゴル人たちはもっぱら古来の遊牧に専心していたことであり、それから半世紀が経った今日の光景とは想像できないほどの違いを

梅棹資料は提示してくれている。近代的な設備の導入によって東スニトの一部の地域では、家畜の頭数が増加した。その一方、牧畜がいちばん多く残っているこの地においてもモンゴルの遊牧文明が跡形なくすっかり消えていった。モンゴル民族と彼らの生業の遊牧は乾燥地帯たるモンゴル高原にもっとも適性を持つことを、過去の長い歴史が如実に証明してくれたが、いまや農耕という生産形態に追い詰められている。これだけではない。「開発」が推し進められ、モンゴル人たちは土地を失い極貧の生活に転落していく。彼らにとってどのような未来があるのか。これは決して文明・文化の問題であるにとどまらず鋭い政治の問題である、とモンゴル人たちは受け止めている。

「東スニトの社会変容―生活に関する聞き取り調査の活用」で、娜仁格日勒は1940年代以来の東スニトの変遷を自然環境と社会環境の両方から取り上げ、わけても長いあいだ、社会主義的な改造、政府主導の強制定住や「禁牧」などといった波濤にさらされてきた人々が、苦しい状況のなかでかろうじて牧畜の伝統を保つ努力を続けている実情を伝えている。言い換えれば、遊牧が培ってきた心性は、遊牧そのもののほどに容易に抹消されるものではないと思われる。このような解析を通じて、貧弱な現状を梅棹記録に描かれた昔日と比べれば、梅棹のフィールドが、モンゴルに対する重層的な理解を可能にするという特徴をもっていたことをふたたび啓発される次第である。

「古来の遊牧に専心していた」、斯様な東スニトを含むシリール地域にも、いわゆる「草地売買」という商業活動によってモンゴル人の利益を吸い上げる漢人商人＝「旅蒙商」の搾取が横行していた。「旅蒙商」たちが草原地帯の市場すべてを独占し、悪行の限りを尽くし、莫大な利益を得ていたことは、いままでの研究で明らかにされつつあるが、モンゴル人自身から構成した商品取引機関であるホリシヤはまだ注目されていなかった。ガンバガナの「戦前期における＜草地売買＞―経済に関する聞き取り調査の活用」は、このような研究の空白を補い、ホリシヤを対象にした独創的な考察である。ホリシヤは戦前期の内モンゴルにおける経済活動の一環として位置づけられ、それについての研究意義も自ずと大きい。

日本側の文献にもよく登場するバンディド・ゲゲーン・スム（貝子廟、現在のシリルホト市）と張家口を例に具体的なデータを用いて実証的な分析をおこなっている。「旅蒙商」のモンゴル人に対する残酷な搾取の実施過程を、漢人商品の流入とモンゴル物質の流出とのプロセス解明によって、詳細に解いている。「旅蒙商」の独りじめの状況のなか、日本大倉系の商社で、内モンゴル中西部地域での活動として大蒙会社が創設された。当社は本社を張家口に置き、草原の奥地まで拠点をつくと同時にホリシヤの設立にも力を貸していた。ホリシヤはモンゴル連合自治政府の直接指導下に置かれ、モンゴル人の創った、純粋なモンゴル人から成る商業経済活動の組織であり、モンゴル人の「草地売買」参加を可能にした。その成立背景は、モンゴル人が政治の主導権を握っていたことであると作者が指摘しているように、政治的な自決権と経済的な自主権は相互に伴う

ものである。換言すれば、政治的な圧迫と経済的な搾取とは緊密に連動するのである。したがって、今日の世界各地の民族問題においても同じことが言える。

日本がおこなった大量な実態調査のなかで、とくに目を引くひとつは宗教についての活動である。とりわけ、モンゴル人の篤い信仰を集めたチベット仏教、つまりラマ教にかかわる調査や研究もいち早くから実施された。これらの調査が中国と異なる独自の信仰を持つモンゴル人社会に対して有効な支配を確立するためにおこなわれたことは、いまさら多言を要しない。近代化の進んだ日本が試みた内モンゴル近代化促進の一措置はラマ教の改革である。改革を実行するために、精力を入れた項目は「喇嘛教宗団」の設立およびその一連の活動である。

当時の多くの調査は寺院について調べていたのと同じように、梅棹も調査隊とともに曠野のなかで寺院など固定的な施設を求めながら聞き取りをした。当然、寺院の機能を考え、モンゴル人社会で担う役割について解明した。1950年代からの30余年にわたって禁止され、深刻な迫害を受けたあと、1980年代後半から復活を許されるようになったラマ教とその寺院の現在はどうか。この問題を扱ったのが白莉莉の「ラマ廟の社会的機能—宗教に関する聞き取り調査の活用」である。白莉莉は長年、オルドスのオトク旗でフィールドワークをおこない、当該地域の代表的な寺院シュルヘイ・スムの復活後の機能変遷および中国国営の大手会社長慶石油会社の草原進出について整理している。これと同時に、ダルハン・モーミンガン旗のバト・ハーラガ・スムでおこなわれた最新の調査では、内モンゴルの四大ラマ教聖地のひとつとして悠久な歴史を持ち、繁栄していた当該寺院が破壊・再建を経験したあとの現在に直面している問題を活写している。二つのお寺の共通点は破壊されたあと、建物は再建できても、経文と僧侶の素養、そしてこれと関連した寺院の機能は復元というにはほど遠い現状である。内モンゴルにおけるチベット仏教の今後の趨勢を見極めるうえでも、参考になる情報を提供している。

第2部の牧畜論では、梅棹のモンゴル牧畜認識に基づいた調査方法論ならびに図譜など梅棹資料の意義、梅棹生態学的視点の特徴、梅棹のモンゴル牧畜認識の独特性およびその限界（とりわけ土着知識と乳製品文化について）が念入りに論述され、梅棹の内モンゴル調査に対して多角度から光をあて、梅棹批評を緻密な資料提示と詳細な理論分析によっておこなった。4篇の論文を収録した。

テクスパヤルの論考「21世紀の遊牧離れ—梅棹図譜の意義」は「遊牧離れの内モンゴル」という強い危機感の視野に立って、自らも経験してきた内モンゴルの遊牧喪失のプロセスと現状にもとづき、梅棹の資料と研究の唯一性を評価した。また同時に、日本の学者たちが「帝国の学者」という時代的な特徴を帯びていたことも指摘している。梅棹調査以降もなく、内モンゴルでは牧畜業に対する改造や強制的な定住化が進められ、1990年代からやがて国家政策として牧畜制限が、さらに牧畜禁止の「禁牧」が実行されるようになった。モンゴル人の牧畜文明が失われ、環境が破壊され、困窮の一途をたど

ってきた現実と、梅棹調査資料に示される豊富な自然環境および独特な遊牧文化との対比はあまりにも鮮明で、インパクトが強いものである。筆者が周りに対して現実への不満と憂慮を訴えていることは容易に理解できる。ここにも、内モンゴル現地出身の研究者にしかできない考えと思想が切実に語られている。

内モンゴルの多くの地域では、半農半牧と言われた1980年代末までの一時期に、家庭ごとに数十頭のヒツジ、ヤギと数頭のウシ、ウマを所有していた。この時代には、バーサンバンプの類はまだ見かけていたものの、1990年代末ごろから「半」であった「牧」とともに見事に姿を消した。バーサンバンプはその名のとおり、牛馬などの糞にとまなう昆虫であり、後者の存在を前提条件とし、さらに家畜と相互に影響し合うのである。ウルゲディ・タイブンの「糞転がしをめぐる土着の知識—梅棹が調査できなかったもの」は、地域研究における土着の知識の必要性和大事さ、そして伝統的なモンゴル草原ではバランスのとれた生態循環が如何にして自然に保たれてきて、またそれが今どのようにして人為的に破壊されているのかを、モンゴル高原の糞転がしであるバーサンバンプの事例から明らかにしている。論考はまた、現地で調査をおこなっていた当時の外国人研究者たちのモンゴル草原に関する生態学的視点と基本姿勢を肯定しながらこれに対する追究も施された。未知の土地について、人間であれ、動物であれ、植物であれ、昆虫であれ、それらに対する土着の知識を盛り込んだ検討をしなかったのは、生態学的方法のためには残念なことである、と表明した。

ナチンションホルの「モンゴルの遊牧に関する梅棹忠夫の見解について—生態学の観点から」は、梅棹が遊牧論のなかで議論した二つの問題、つまりモンゴルの遊牧における移動、家畜の採食と草原生産力の関係に対する梅棹の視線を生態学の観点から再検討し、自身の考えを述べた。モンゴルの遊牧移動の理由と目的に関する梅棹忠夫、後藤十三雄ら同時代から現在までの日本人学者、さらに、欧米やモンゴルの学者たちの代表的な見解をまとめたうえで、筆者のフィールドワークで得た新しい結論を示した。それは、遊牧の移動が草原の生産力およびその異質性と密接な関係を持っていること、である。移動の距離と頻度に草原の現存量や群落の種組成がかかわることを明らかにして、梅棹等と異なる視点を提示した。家畜の採食と草原生産力の関係については、採食による攪乱が植物の成長を促すことはあり得ないという梅棹の考えは、時代的な制限性を帯びていると指摘した。実際、採食圧は栄養の循環を促進し、生態系の生産力を向上させる；適度の放牧圧は草原群落における種の多様性を促し、群落の一次生産を高める効果がある、と結論づけた。

梅棹と違って、後藤十三雄の記述した遊牧の仕組みが正確であることはナチンションホル等の研究によって証明された。したがって、梅棹の限界の根源のひとつは、「特定の風土と歴史の中で蓄積された人類の経験」を十分に重視しなかったことにある、と理解できよう。筆者のこの感想は前述のウルゲディ・タイブンと同様であり、土着知識や当

事者（原住民）立場の尊重・理解が研究者にとっていかに重要であることを再度証明したように思われる。

乳製品を加工し、それを生活の糧にすることは牧畜社会の本質を支える重要な活動の一つであり、また牧畜文化、乳文化を発展させた技術の体系でもある。モンゴルでは、搾乳活動が進化の境界を遂げ、乳製品の加工技術が極度に発達した。そして、乳加工に対する認識が洗練され、北アジアの乳文化の発展に貢献してきた。そのために、乳文化研究に興味を持つ者は必ずモンゴルへ足を運び、牧民と家畜の硬い絆の象徴である乳と乳製品に独自の慧眼を開き、遊牧の誕生と牧畜の本質に悟りの原点を探し求めるのである。梅棹は、乳をめぐるモンゴルの生態と題して、乳搾りについての論述を展開した。オルトナストの「もうひとつの乳製品——梅棹が記録できなかったもの」は、梅棹の研究成果を吸収しながら、梅棹が記録できなかった内容を書き記し、興味深い分析をおこなった。

伝統的な製造法がすたれ、独特な乳文化の存続が脅かされている現状のなかで、シリーゴルのショローン・フフ・ホシヨ地域に守られている特有な乳製品の加工体系としてのトゥドを考察し、チャハルの事例として報告することによって、モンゴル乳文化の一部の重要な記録を残した。梅棹に見逃された乳製品のひとつのトゥドは昔から存在していた。オルトナストはトゥドの分布、ルーツなどを全面的に論述し、チベット高原の遊牧民の伝統食であるトゥドの名称と加工体系がモンゴルに伝わってきたとの結論に達した。さらに、この事実は文化の伝播論及び文化複合を理解する好事例だというように理論的究明も試みた。

このように、本書は現代における当事者（ネイティブ）の立場に立って梅棹の内モンゴル調査を多角的に再検討した論集であり、文化人類学的な調査資料とその考察方法は、近現代モンゴル史研究に持つ意義の重要性を改めて証明しうるものである、と確信している。